
あおに重なる

がっちょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あおに重なる

【Nコード】

N0899Z

【作者名】

がっちょ

【あらすじ】

獣族と魔族がくらす世界、リトビスに現れたのは、記憶を失った少年。少年の存在はまさにありえないもので、困惑しながらも生活していく。リトビスの紛争に巻き込まれた少年は、自分に隠された大きな秘密を知っていく。

プロローグ（前書き）

初投稿です 文章力なんて全くないですが（<―>）のんびり書きますので、是非読んでください。

ブローグ

歪みのない綺麗な月

届きそうで届かない

近そうで遠い

吸い込まれそうな黒

浮かぶ あおい月

どんどん薄れてゆく

僕の記憶の中の…

木枯しが吹きはじめたこの日。僕はいつものように学校へ行くため、家のドアを開けた。
肌寒い気温に体が震え、学ランの襟に首をうずめる。

「ワン！ ワン！」

庭から愛犬、柴犬のコタローが駆けてきた。名前を呼ぶと、僕の足を元気に走り回る。

「相変わらず元気だな。学校から帰ったら、散歩に連れて行ってやるからな」

「わかった」とでも言うように一際大きく吠えたコタローの頭を撫で、僕は道路に出た。

近所の人たちと挨拶をかわし、横断歩道にでる。

信号が丁度赤になり、足を止めた。冷たくなつた両手を擦り合わせていると、目の前を軽自動車走った。そのせいで、冷たい風が体を襲う。

「寒っ」

『主様。お時間がきました』

知らない声。突如頭の中に響いた声に振り向く間もなく、視界は闇に包まれた。

デイマイオス大陸。

緑鮮やかな森の中。地には色とりどりの花が咲き、木の上では鳥がさえずっている。

日に照らされ淡緑に色付く森の中に、少女の姿があった。

少女は地面に座り、花を優しく摘み取っている。

鼻歌を交えながら花を摘んでいた少女の耳がピンと立った。その耳は獣のような白い耳。そして、スカートからは白い足と白い尾が覗いている。

少女は辺りを見回しながら耳を動かし、何かを見つけようとしていた。

すると、一点の方向を見つめ、摘み取った花を握ったまま、その方向へ走り出した。

辺りを気にしながら走り、周りよりも少し太い木の裏を覗いたとき、

少女は「あっ」と声を漏らした。

視線の先には、木にもたれ掛かるようにして少年が眠っていた。少女はまじまじと少年を見た後、正面からその顔を覗いた。そして口を開く。

「だあれ？」

問いかけに応えるように、瞼がゆっくり上がった。

始まり〔1〕

彼は目を開けた。

黒曜石のような瞳で空を見る。視界に広がったのは黄色い天井。

ここは…？

火の光で辺りは明るかった。ぼんやりとしていた意識がはつきりしてきたことで、寝ている自分の体に何かが乗っているのに気づいた。顔を少しあげてみると、足のところに少女が丸くなって寝ている。そして彼は目を見開いた。

耳…なのか？

目を奪われたのは伏せられている白い耳。獣の耳を持つ少女をおこさないよう、体を起こそうとした。

が、思ったより体に力が入らず、足元の小柄な体を蹴ってしまった。

「うん…」

小さな声に彼はピタツと動きを止めた。「ふああ」と欠伸をし、目を擦りながら少女が起き上がる。

開いた青い瞳が彼を捕らえると、表情がぱあっと明るくなった。

「目が覚めたんだ！」

眼前にせまつた少女に少し後退する。

「森の中で寝てたんだよ」

「森？」

「うん。カミアが見つけたの」

「カミア？」

「カミアだよ」

自分を指して言ったところから、「カミア」というのは少女の名前のようだ。

カミアは膝立ちになり小首をかしげた。

「あなたは？」

「えっ」

「あなたの名前は？」

そう訊かれ、答えようと口を開いた彼の動きが止まった。

僕の…名前？

どれだけ頭の中を探ろうとも、答えは出てこない。それ以上に恐怖が溢れてきた。

彼の中には何も無かった。

「僕は一体…」

呟いた言葉にカミアが首をかしげていると、部屋の大きなドアが勢いよく開かれた。

ドタドタという荒々しい足音と一緒に三人の男が入ってくる。

「カミア、身元の知らない者を城に入れたというのは本当か！」

先頭にいた金髪の男が叱るような口調で言った。

「もう、ケイト！」

カミアが頬を膨らませていると、一番後ろにいた茶髪の少年がおどおどした様子で前へ出た。

「申し訳ありません。バレてしまいました」

「ケイトのドジ！ 約束したでしょ！」

「カミア、我が儘はよせ」

目の前の会話を、彼は呆然と見ていた。驚いたことに、カミアと話している二人にも獣の耳があるのだ。

金髪の男はカミアと同じ白い耳と尾。少年は茶髪より薄い色をした、ふわりとした耳と尾である。

「ひっ！」

急に右耳の辺りを触られ、とつさに右側を見れば、二番目に入ってきた緑髪の男が、彼の黒髪をあげて耳をじっと見ていた。そしてこの男にも獣の耳と尾。

「この子、獣族じゃないみたいだよ。魔族でもないし」

「それは本当か！」

そう言うなり、金髪の男は腰の剣を抜き、切っ先を彼にむけた。

「おい、お前は何者だ」

「いや、その…僕は…」

突然刃物を向けられ、混乱している彼の脳裏がフラッシュした。何もなかった頭の中に、ある文字が浮かぶ。

「神崎…神崎郁斗です」

「は？」

「僕の名前…です」

「カンザキ？ おかしな名だ。カンザキとやら、どうやって城に入った」

「城…？」

その言葉に彼…郁斗はぼかんと口を開けた。

「まさか、知らなかったとは言わせんぞ」

「はいその通りです」と言ってしまうば、目と鼻の先にある剣が牙をむく。そう判断した郁斗は何を言えばいいのかわからず、目を泳がせた。

そんな彼を助けたのはカミアだった。

「もう！ やめてよヴィル」

郁斗と剣の間に割り込み、男を睨む。

「さん付けで呼べと、何度も言っただろう」「意地悪なヴィルはヴィルでいいもん」

眉をピクピク動かし、今にも怒鳴りそうな男の肩を、緑髪の男が掴んだ。

「落ち着けよヴィル。冷静になれって」

「なんだ、お前から斬られたいか」

「おー恐っ。さっき言っただろう、この子は獣族でも魔族でもない。よく見る」

「なら一体…」

金髪の男は何かに気づいたかのように顔を上げ、郁斗を見た。次に何を言われるのかと思い、郁斗の体が固くなる。

「嘘だ。魔力が無いだど!? それに黒の眼…」

そう、ありえない組み合わせだ」

「黒眼の人間…」

心底驚いた様子の男は剣をおさめ、踵を返す。

「とりあえず兄上に報告だ。それまでここを動くな。行くぞ、リイド」

「はい。それじゃあね」

二人の男が部屋を出たことで緊張が解け、郁斗は大きなため息をついた。

静かになった部屋の中で、一番最初に動いたのはカミアだった。

「どうしよう、アズにみつかったちゃう」

「仕方ありませんよカミア様」

目の前でしょぼんと垂れている耳を見て、郁斗はカミアの頭を撫でた。

「よくわからないけど。僕のせいで迷惑がかかってるみたいだね」
「違うの。悪くないから」

今にも泣きそうなカミアの頭を撫でていると、茶髪の少年がベッドの側に立った。

「改めましてカンザキ様。僕はカミア様の従者、ケイト＝リガルと申します」

「あ、神崎郁斗です。別に「様」とかけなくても…。名前で呼んでください」

「カンザキというのが名前では？」

「神崎は名字で、郁斗が名前です」

「不思議な名前ですね、イクト様は」

「いや、だから「様」は…」

ケイトは困ったように笑う。

「僕は従者の身なので。ではイクト殿でどうでしょう。僕への敬語は不用です」

ケイトは笑顔のまま言った。

これ以上何を言っても彼はきかないだろう。そう思った郁斗は頷いた。

どこか固い自分の呼び方に疑問をもったが、何も聞かないでおい

「それでは」ケイトが何かを差し出してきた。

「イクト殿が来ていた服を綺麗にしておきました」

そう言われ、郁斗は今自分が下着一枚の状態であることに気づき、

ケイトからひつたくるように服をとった。

自信が着ていたという服を着た郁斗は困惑していた。

ここはどこなんだろう。

ここの人たちは皆、動物のような耳と尾があって、どうも違和感がある。

僕がそうじゃないからかな。

それより僕は？

自分がわからなくて…怖い。

「イクト、真っ黒だね」

カミアの声で我に返った。

「そうだね、カミア」

自分の姿を見て郁斗は同意した。黒の学ランに黒髪黒眼、まさにカミアの言う通り。

「そういえば、さっきの二人は誰？」

「ヴィルとリイドだよ。ヴィルは意地悪で、リイドは面白いの」「最初に入ってこられた方がヴィンセント様で、一緒におられたのがリイド様で…」

カミアの説明では郁斗が理解できていないと察したのか、ケイトが付け加えた。

ベッドのシーツを整えて郁斗を見たとき、その目が大きく開かれた。

「イクト殿…魔力が」

「へ？」

魔力？ さっきもそんなこと言ってたな。

訊こうとしたとき、部屋のドアが開いた。

そこに立っていたのは、ヴィンセントとリイド。

「おいお前、ついて来い」

「ヴィル！」

走り出そうとしたカミアをケイトが止める。

「ケイト、カミアをつかまえておけよ」

「はい…」

カミアとケイトにこれ以上迷惑はかけたくない。そう思った郁斗は、「行くぞ」と言ったヴィンセントの後をついていった。

大きな廊下を歩く。ヴィンセントとリイドは背が高く、足も長いせいか、郁斗は二人の後ろを小走りに走っていた。

「どこへ行くんですか？」

「兄上のところだ」

「兄上？」

この人兄弟がいるんだ、と思っている郁斗に振り向くことなくヴィンセントが続ける。

「俺の名を聞いただろう。それで分かんのか」

はぁ、とため息をついて言ったヴィンセントの言葉に郁斗は絶句する。

「俺の兄上は王だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0899z/>

あおに重なる

2011年12月3日13時52分発行